

企業名： 夢真ビーネックスグループ

レポート名： 統合レポート 2021

1. この会社が目指す姿が理解できるか

わたしは、この会社が将来的にどのような会社になっていくことを目指しているのか統合レポート2021を通して、ある程度は理解できたと思っている。夢真ビーネックスグループは派遣会社であることから、社員の人権や待遇を重視するなど社員を大切に扱いながら、会社として成長していくことを目指しているように思われる。特に以下のような点から、その片鱗をうかがうことが出来る。この会社は、専門性の高い知識を必要としている人材を派遣している会社であるにもかかわらず、即戦力のみを求人せず、未経験者に対しても育成システムなどを準備して、扉を開いている。まだ統合して1年4か月ほどの月日しか経っておらず、まだまだ未整備な点もあると推測されるが、人材の育成・成長に重きを置いていることは今後の会社の未来像に前進する助けとなるだろう。

2. この会社の競争優位性が理解できるか

わたしは、この統合レポート2021を通して、夢真ビーネックスグループには競争優位性があると考えられると思う。その理由には、二点ほどの理由がある。一つ目は、この会社は、派遣会社の中でも、機電(機械、電子、電気系工学)とIT部門のエンジニアを派遣する会社であることが挙げられる。当然これからの時代、多くの会社がIT化の必要性を認識し、その備えに追われることが予測されている。しかしながら、そのようなテクニカルなことが出来る人材や部署を各々の会社で備えることは、金銭面などで厳しいというのが現状である。このような点を踏まえると、夢真ビーネックスグループのエンジニア派遣というやり方は、各々会社にとって魅力的であり、今後仕事の依頼が増加することが見込める。二つ目は、この会社が2021年4月1日の株式会社ビーネックスグループと株式会社夢真ホールディングスの合併によって、国内最大規模のエンジニア数を備えたことが挙げられる。夢真ビーネックスグループが派遣会社であることを踏まえると、当然ながら派遣できる社員(エンジニア)が多くいるに越したことはなく、この点は他社よりも明らかに優位を保っている点であると言える。上記のように、この会社は将来的に需要の拡大が見込まれている分野に強みがあり、しかも数のうえでも強みを持っていることから、この会社には競争優位性があると考えられる。

3. その競争優位性に持続性があるかどうか理解できるか

この統合レポート2021からは、この会社の競争優位性をどのように維持していくのかは読み取ることが出来ず、不明瞭であると考えます。もちろん、統合レポート2021では企業の成長の持続(サステナビリティ)のために、何が必要なかが書かれています。しかしながら、それが書かれているスペースはあまり大きなものではない上に、書かれている内容も社員の人権と労働に係るコンプライアンスを遵守するなどあまり具体的な策ではなかった。このような点から、一般的に難しいと言われている長期的な企業の優位性をこの会社が維持できるのかどうかは、理解できなかつた。ここからは、わたしの考察だが、先述の通りこの会社は設立されてからまだ1年4か月ほどしか経っておらず、まだまだ経営を軌道に乗せることに集中しているため、持続性などをまだそれほど重視していないのではないかと考えた。

4. この会社で自身の人的資本の価値向上を達成できると思うか

わたしは、もしこの会社に就職した場合、自分自身の人的資本の価値を向上できると考える。なぜなら、先ほども述べたように、この会社にはエンジニア未経験者であっても、研修や教育などの会社からのサポートを通して成長できる地盤が存在している。一人前のエンジニアの数が増えていくことは、社員の人人的資本の価値が上がることを意味し、このことは社員本人のためだけでなく、会社の利益向上や企業拡大にもつながるため、とても重要であると思われる。また、もしわたしがこの会社の経営に携われるとすると、いかに派遣会社の社員の人権を大切にしながら、会社の利益を出していくかという難しいタスクをこなすことになり、成功の有無にかかわらず、素晴らしい経験を獲得できることになるだろう。

5. 報告書にはどのような改善余地があるか

わたしは、この統合レポート2021に目を通した後、いくつかの改善点やこれから夢真ビーネックスグループにやって頂きたい点を思いついた。そのことについて、ここでは書く。まず一つ目に、今後この会社が独自に作り上げた「幸せ指数」をデータが集まり次第、表やグラフに書き起こし、どのような数値の推移をたどっているのか、2025/6期目標にどれだけ近づいているのかをステークホルダーにも一瞬で理解できるようにして頂きたいと考えている。わたしは、この「幸せ指数」という会社が定めたパーパスの実現度を数値化する試みを非常に興味深いと考えている。この数値が上がっていけば、なかなか評価が難しい社員の待遇向上の努力が実を結んでいることが容易に分かり、ステークホルダーが満足することはもちろん、投資家や他企業などからも注目を置かれる可能性

も高まり、企業拡大や新たな取引のスタートにつながることもあるかもしれない。二つ目は、社員を大切にしていることを強く強調するためにも、この会社の社員の生の声をレポートに加えていくことである。当然、経営者が会社の目指す姿や社員に対してどのようなサポートをしているのかを述べることは重要である。しかしながら、ただ経営者側の主張を述べるだけでなく、会社からサポートを直に受けている従業員の声(批判的なものも含め)も掲載することで、会社が行っていることの信ぴょう性や信頼性の向上につながると考える。